

巻頭言

望ましい保育施設の

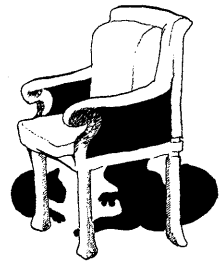
在り方を考える

—大人の立場と子どもの立場—

森上 史朗

今、時代の変化の中で政治・経済・教育などあらゆる分野で大きな変革が進んでいる。保育もその例外ではない。たとえば保育制度についていえば、これまで幼稚園と保育所はそれぞれの果たすべき役割が異なるというこ

とで、多少でも制度と違った運営を行っている保育施設に対しては、行政管理庁・文部省・厚生省などから強くその是正が求められていた。しかし、最近では規制緩和と自由化の動きの中で、保育施設も地域の実情に即し



て、独自の在り方を構想してよいということになり、今、各地で幼保一体化施設が増加しつつある。また、幼稚園で、正規の保育時間をこえた「預かり保育」や、一・二歳児などの未就園児を受け入れて保育をするなど、「幼稚園の保育所化」が進行しつつある。

そうした動向の中で保育所の不足を幼稚園の空き保育室で代替しようとする「横浜方式」などがマスコミの注目を浴びている。

また、幼稚園の保育所化に関して、これは家庭教育の崩壊につながるとして反対する動きもある。これとは別に幼稚園は保育所とは違って、学校教育を施す教育機関であるとして、幼稚園の学校化を推進しようとする「幼児学校構想」も登場してきている。

一方、地方自治体では財政の効率化の視点から保育施設の統廃合を推進しようとした

り、公立施設の民営化を図ろうとする動きが各地で出てきている。さらに、保育者の非常勤化の動きもあり、先日筆者が訪れた市では保育所の正規職員は三分の一であり、三分の二は嘱託職員で五年を限度に退職する規定となっていた。

筆者も国が一律に保育施設の在り方を決めることには反対であり、それぞれの地域の実情や子どもの生活の実態をとらえて、それぞれの園がもつとも子どもに即した保育を創造するということは重要であると考えている。しかし、そのためにはいくつかの前提を必要とするように思う。すなわち、保育施設の在り方を構想する人たちが経営の効率化や園児集め、保護者の要求といった視点だけではなく、乳幼児の発達の特性やそれにもとづく保育の本質、その仕事に携わる人の専門性につ



いて、十分に理解があることが必要である。そうした点では、筆者が多くの行政担当者や保育施設の長といわれる人たちと接していて、それらの人たちが、「保育の専門性」を非常に軽視して、いわゆる「自称専門家」として自信をもって次々に大胆な改革の構想を述べられるのに大きな危惧をいただいている。これは、保育を狭いカプセルの中に閉じこめて、外からの発想を拒否せよということをいつているのではない。乳幼児の発達の特性や保育の本質から目をそらさないようにしながら、異なった分野の人たちとも交流し、絶えず保育を開かれたものにしていくことも必要と考える。

一般的に言つて、望ましい保育施設を構想する際に、①行政の立場、②保育施設の立場、③保護者の立場、④保育者の立場、⑤乳

幼児の立場の五つがあげられる。それぞれの立場が一致すればよいのだが、それは、たいていくい違うものである。

最近の保育施設の在り方についてのさまざまな構想を見ると乳幼児の立場に立った発言が最も弱いように思われる。そのことが今、われわれに最も求められていることではないかと思う。

(青山学院大学)